

[33] 文學研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2556541>

出版情報 : 文學研究. 33, 1943-12-30. The Kyushu Literary Society
バージョン :
権利関係 :

文學研究筆者別索引

(筆者はABC順による、括弧内は輯號を示す)

春日政治

片假名交り文の起源に就いて(一)

古訓漫談(二)

『小學方言講義』より(四)

高野山にて觀たる古點本(七)

宇治拾遺物語の一本より(九)

金光明最勝王經註釋一本の古點について(一四)

聖語藏御本央掘摩羅經の字音點(三三)

片山正雄

文學科學概説(一)

小島吉雄

明治初期の歌論(一)

宗祇の晩年(三)

新古今和歌集の撰集態度と撰集事業(五)

所謂石津本新古今和歌集に就いて(八)

連歌に於ける美的情調(一、一二)

新古今集歌風と註釋の問題(一八)

春日博士所藏二十一代集中の『新古今和歌集』に就て(三三)

新古今集寫本に於ける撰者名の頭書について(二八)

新古今集傳本考(三〇)

小牧健夫

ヘルデルリンのエトナ劇斷片(二)

クライストの『公子ホムブルク』の一問題(六、八)

銀の鈴(一一)

ゲーテの從軍記(一五)

ヘルデルリンの半神觀(二二、二四、二六)

榮花行(三三)

クライスト隨想(二八)

獨逸浪漫主義の諸問題(三〇、三二)

松枝茂夫

鏡花縁の話——異國廻りを中心として(二六)

蝶庵居士張俗(二八)

葉天寥とその一家(三〇)

醒世如緣傳の話(三三)

目加田誠

填詞選釋(一三)

民國以來中國新文學(一四)

雅に就いて(二〇)

白樂天の諷諭詩(三三)

郊詩考 附東蔭考(三五)

詩經に詠はれた自然界(三八)

陳碩前傳(二九)

春秋の斷章賦詩について(三一)

中山竹二郎

『貧者の友』ウキリアム・ラングラント(一)

イギリス中世の宗教劇(五)

イギリス古劇の詩形について(九)

チヨウサアと現代英語(一一)

散文韻律について(一九)

チヨウサアに於ける措辭的特徴について(三三)

ウエイリアの英譯『源氏物語』(三三)

チヨウサアその生涯と性格(三三)

キヤンタベリ巡禮の世界(三〇)

成瀬正一

十八世紀に於ける文藝サロン(二、三)

新舊兩派の文藝論争(七)

モンテニエと東洋の悟道(二六)

旅行報告書(二六)

野上豊一郎

杉田玄白とその周圍の人達(一九)

小野島行忍

ザツカ・パンハ・スツタンタ (三一)
リツ・サンハハラ (一〇、一一、一三)
梵詩メーガ・ヅータ散文譯 (二八、二九、三一)

笹月清美

天平八年の遺新羅使一行の歌 (一三)
古事記の文藝的性質に關する認識の發展 (一七)
文藝活動の機構 (二一)
本居宣長における道と文藝 (二三)
本居宣長の成立過程を示す二三の傳本についで (二六)
本居宣長の國語研究 (二九)
小林歌城のテニヲハ説 (三一)

佐藤通次

世界の劇性とゲーテの『ファウスト』 (一)
雅歌 (四)
生の悲極性 (八、九) (一〇、一七)
「思ふ」と「考へる」 (一四、一六、一七)
「老」と「親」と「體験」 (一四、一六、一七)
「老」と「親」と「體験」 (一四、一六、一七)
創世神話とわが民族の原體験 (一三)
「生む」と「論理的構造」 (三五)
「超人」の事行論的解釋 (二七)
「見る」と「生む」と「研究に寄せて」 (二九)
表現の契機——「ファウスト」研究に寄せて—— (三三)
文藝の志氣——「ファウスト」研究に寄せて—— (三三)

進藤誠一

『ファイガロの結婚』とポーマルシェー (一)
ユーリエエヌ・ラビツシユの喜劇 (六)
スクリエープの功罪 (八、九、一一) (一四、一五)
コメディー・フランセーズの沿革 (一四、一五、二五)
十九世紀中葉以後に於ける佛蘭西風俗劇 (二八、二九)
日本に於けるコメディー・フランセーズ (二八、二九)
モリエールの結婚 (二七)
マリヴオール覺書 (二九)
フランスにおけるイタリア人劇團の業績 (三二)

高木市之助

吉野の鮎 (二七)
國見攷 (三〇)

田中晃

表現の構造 (一六)
萬葉歌人の國家思想 (一八)
行爲と哲學 (二〇)
日本の現實主義と「ものゝあはれ」 (二三)
生成の根據としての自然 (二五)

豊田實

日本に於けるシェイクスピア紹介の歴史 (一)
英吉利漂流邦譯考 (四)
芥川龍之介とエドガ・アラン・ポオ (七)
基督教聖書和譯の歴史 (一一)
故坪内博士の「英文小學讀本」 (一二)
日本とシェイクスピア (一六)
日本に於ける英文法紹介及び研究の歴史 (二〇)
俳句と英詩 (二三)
生活、文化の反映としての英語史緒言の一節 (二六)
言語起源の問題——英語史「第一部概観」の緒論—— (二九)
言語を通して見る英人祖先の生活——大陸時代—— (三一)

山内晋卿

六朝時代の展望 (二)
牟子問題の清算 (四、五、六)
玉鳴盛氏の佛典觀 (一二)

矢田部達郎

古語に於ける「てには」の意義 (三三)

吉町義雄

『物類稱呼』西國方言索引 (一)

九州方言の特異性(二、三、五)
 島津齊彬の「ローマ字日記」と長田穂積の『菊池俗言考』(七)
 博多仁和加用語に現れた活用一段化趨勢(一〇)
 日本語動詞現在時形態論(一五、一七、一九、二二、二四、二六)
 九州方言四段・變格活用動詞分布相(三三)
 紫雲鹿兒島方言文學四書抄(二八)
 山人施福多「日本文庫及日本文學研究提要」(三〇、三三)

編輯後記

さきに春日教授を送つた本會は、このたびまた小牧教授を送らなければならぬことになつた。小牧教授は春日教授のあとをうけて、多年本會の會長として御盡瘁下すつたうへ、その蘊蓄を傾けて會誌文學研究のために健筆をふるつて來られたが、去る九月三十日を以て定年のため學部を去られることになつた。

本會は教授の功績を記念し、かつ教授に對する感謝と惜別との情を披瀝するために、本誌第三十三輯を小牧教授還曆記念號とし、役員全部が執筆することとしたのである。

なほ本會は小牧教授を名譽會員に推薦し、今後もあらゆる機會に御執筆を願ふつもりである。

また會長の後任としては豊田教授を推戴し、全役員益々奮勵して學問報國の一路に邁進する覺悟である。

(目賀田、進藤)